



TITLE:

夜話

AUTHOR(S):

CITATION:

夜話. 天界 1934, 15(163): 37-39

ISSUE DATE:

1934-10-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/166901>

RIGHT:



夜話

或る前夜

- A. 「何んだか今夜は殊に街の騒音が頻繁に傳つて来る様だ。……風のセイだね。」
- Z. 「毎分五臺の割合で眞下の國道を疾驅する車が計へられる。」
- A. 「矢張り上層へ上層へと我々が上るに従つてより廣角に地上に聯結させられるとでも云ふかな。」
- Z. 「同様自然科学が一般經濟社會から幾多の枝系を執つて離反しながら一方地上の土には愈々根廣くその構成を依存せなければならぬのだから。……」
- A. 「その言葉で思ひ出したのだが、經濟社會と今の高度技術は何んな函數關係で結ばれるものだらうか。最近或る經濟學者が雑誌に氣を吐いてゐたね……一つの技術が一つの經濟をつくり、技術の革命が經濟の革命をもたらすものだとき。」
- Z. 「一應は領くことも出来さうだ。成程近代高次機關の廻轉は刻々の加速度で失業者を生産して居る。……殆んどその數が其の瞬間に於ける價値を決定する程に迄。そしてなほもダイナモは咆え續ける。さう云ひたいのだね。」
- A. 「すると茲に異端者が出現して来る、特殊な理論科學特殊な高度技術、そんなものが社會から段々阻隔されて行くのではないだらうか。……少くとも社會改革には大した役割をふりあてられて居ない事になり。Chaos より Cylindrical-world 迄の進化は社會の外の出來事としか考へられなくなる。」
- Z. 「オイオイ、君が天文學者だからと云つてそんなに拗ねてくれては困るよ、それより問題の經濟學の先生に食つてかゝる事にしやうぜ。」
- A. 「先づ僕が火蓋を切る。先づその先生は應仁の亂の眞只中に Machine-gun を提げて登場して來て居るのだ、紫雲閣にラジオ放送局を設けてしたり顔をして居るのだ。」
- Z. 「それでいゝよ、もう澤山だ二陣は僕が承らう、で、さきの技術革命による失業者だが、果してそれならば失業者は此の經濟社會に不必要なものではないかと云ふと、さうでないのだね。失業者は失業者自體で社會の一つの役割りをもつて居るので巨大な齒車の廻轉の傍にルンペンとしての經濟機構の一單位を占めなければならないのだね。少くとも従業者の存在のために。」
- A. 「云はんや、特殊な自然科学が長距離砲を考案せぬから又手打ちそばの特許を出さぬからといつて物好きな趣味だと考へられたくないね。自然科学が經濟社會の何の支持もなく勝手にスクスク丈び屢々一つの發見一つの創造を下つては一つの特許を産むものではないのだから。」
- Z. 「一つの高次技術と云ふものは社會の意識的又は無意識的な要求の總和が量的に辯證して始めて新しい飛躍を執るもので此の意味に於て應仁の亂にタンクも出動することはないだらう。それにしても今夜のアンドロメダは餘程美裝して見える。」

A. 「心なしか星雲が何かの合圖を送つて居る。此れは夜話の灯だね。」

Z. 「たまには此の夜長がを架空な傳説を求めてチグリズ、ユウフラテスの谷間に彷徨ふのもよからう。」

× × × ×

× × × ×

最早やイシオピヤ全土に其の恐怖と呪ひの聲が 膨れ上つて來るのです。殆んど打ち沈んだ王宮の影の濃密に今は美の誇りが褐色に女王 カシオペヤの胸部を食傷するのです、海の精女達の憤怒が遂に此の沿岸を噛み羊齒白く荒浪を呼び果ては猖獗した黒潮の下にイシオピヤの叫喚が壓しつぶされるのです。……怒濤は巨大な怪鯨を生みその雙牙は眞一文字に王宮を貫く ネーレズの瞋恚でなければならぬのです。民衆の不安におびえる一日一日の生命は漸時數を高め地のいぶきとなり遂にジョーヴの神託となつて イシオピヤ王セフユースの上に垂下するのです。

月落ちて悲痛に雲の舞ふ夜、白き贅アンドロメダ 姫はとある巖角に鎖がれるのです。……女王の謝罪と謙讓をして人民の生命が美しい處女の肌に掩蔽されるのでせうか。そして怒號する海の振幅が王姫の啜泣きを餘りにも助けなき、一ときの汐の花に縮小するのです。……これは夜でなく闇でなく混沌の呻吟に近いのです。イシオピヤ全土の色褪せた祈りがかすかに流れて來るのです。……闇に衰へ風にいためつけられてともすれば絶え々々の挽歌でもあるのでせう。不氣味に怪鳥が鳴いて落ちます。浪に立つ巖のこれは破れかぶれの泣き笑ひです。

漸て海流を割つて巨鯨の切迫する事でせう。……なんと云ふ兇暴な逆理の遂行でせう。……全く惡血に早る矛盾の跳梁です、……それさへもネーレズよりの死の使者なれば。

波頭は瞬ちに碎け度を失して乙女の肢體に眞白く泡立ちます。天地の狂ふ中にこれは一點の白色が繋がるるアンドロメダの肉體です。……既に逃れざる運命を知れば唯打ち震えるは彼女の美しい捲毛のみで 冷石に迄静止した肌は蒼ざめた諦めにべつとり濡れて居ます。

母なるカシオペヤの虚榮の市は終局に 最愛の王女をさらさなければならなかつたのです。天に唾するものの受くる因果律の悲しい示現。……怯ゑに怯

あたドス黒い度の騒擾。

「オヤオヤ何うしたと云ふのだらう。素晴らしい果敢と獻身の愛の楔でこそ此の處女を繋ぐものなのに、殆んど神の大きな手落ちなのだ。」

そんな聲が突然巖角の犠牲の前に湧き上るのです。……陰風に混じて此れは又冴え冴えとした若さの反響が。

アンドロメダはフト眼を開きます。依然暗さが視野の全部なのです。

「さうさう、こりやあ私の過失でした。此の隠れ蓑はすつかり美しい暈光をとまどはせてしまいましたね。」聲に一瞬遅れて彼女の前がさつと光量するのです。健康な若者が光るが如く突つ立つて居るのです。餘り忽然な天地の遊戲です。既に死の大理石の様に化石して居た乙女のすべてが瞬時に過度な色彩の眞只中にもち來たらされたのです。若者の胸がバツと大輪に咲くのです。次には處女性性が心身を眞赤に染むのです。アンドロメダの裸身は辛くも顔色を千々に亂る髪毛に隠さなければならぬのです。……これは最後にとつておかれた女性の狂想に迄弾すむ切れ切れの抑揚でせう。消え入らんばかりに僅小の自由度をあがく彼女です。……兩手に食ひ入る鐵鎖は未知の海魔の怖懼にも増して此の輝ける勇士の突然な出現により怨めしくさへ……。

左らでだに乙女の纖細い心維は縄に縄れて居るのです。……死の陰影と羞恥心の臨界に今は悶へ息すく無數の流線が彼女の祕そかなる歪曲を阻まなければならぬのです。闇が危くはにかみに噎るところです。

「私は何故斯機な憂き目にアナタが漂されて居るのかを問はないでせう。……それは屢々最も美しい美が換へ難い寶玉として世界に賭けられる事を知つて居るからです。そして此のミナトヴァの劍は何ものをも貫かなければなりません……永遠の様に鋭く。」

總ての理の彼方に斯かる美を滅却することはそれ自體が最惡であり死であるのですから……。」サツと浪頭が二人の足元に分裂します。

「王姫はつゞけさまに大きくくさめするのですでした」——

た　　よ　　り

拜啓 初秋之候益々御清榮賀し奉ります

陳者昨十六日電報にて御知らせ申上りました通り元臺灣支部長見元了氏十五日突然腦溢血にて御他界遊ばされました。臺灣よりは去る六月御歸郷に相成り天文協會高知支部を作るべく色々御指導御世話様になつて居りましたのに急に御長逝になり我々一同事の外淋しふ存じます。此の上は見元氏の意を繼ぎ御志に反しない様及ばずながら努力するつもりで御座居ます。

右不取敢御知らせまで如此で御座居ます。 草々

九月十六日夜

高知 正 木 健 三